

第1次西日本豪雨ボランティア 報告

2018年7月15日
(社)神戸国際支縁機構
理事長 岩村 義雄

<序>

中国地方の広い地域にわたって、48時間降水量は史上1位になりました。九州北部から岐阜県まで11府県にまたがって、まれにみる降雨量でした。行方不明者を含めて、9日の時点で150名を上回ると報道されていました。結果論として、学者たちは科学的な分析を発表しています。しかし、なぜ前もって予測することができなかつたかについてみんなで考える必要があります。被害について、昨年7月の九州北部豪雨(2017年7月6日)の教訓を忘れていることが最大の要因です。

日本全体で起こっている自然災害を甘く観たことを反省しなければなりません。

アジアの最貧国ネパールは世界最高峰のエベレスト山などヒマラヤ山脈の地域においても豪雨による水害が及んでいます。

2018年7月7日、倉敷市対策本部の炊き出しの依頼を受けました。倉敷市立第二福田小学校に、毎回300食分、約1週間の食材を購入し、機構のハイエースに積み込み、8日(日曜日)の夕食目がけて出発しました。その2週間前に第6次九州北部ボランティアで合流したばかりでした熊本支所の大島健二郎君も熊本から倉敷を目指しました。倉敷は彼の出身地でもあります。倉敷から東北ボランティアに希望したことがきっかけで、熊本・大分地震(2016年4月14日、16日)において益城町で16日から一緒に活動した仲間です。機構の事務局員でもあります。

倉敷市立第二福田小学校に到着すると、市の職員の方たちが待ち構えておられました。地元選出の市議員も積極的に仕えていました。災害の恐怖体験を体育館で傾聴ボランティアをさせていただきました。東北ボランティアに参加した岡山県の地元のメンバーたちとも再会。炊き出しは最大人数の避難所である倉敷市立第二福田小学校から始まりました。

11日の昼食提供には本田寿久事務局長も第五福田小学校に、アニス・アハマド・ナディーム[日本アハマディア・ムスリム協会]本部長たちも9日に応援にかけつけてくださいました。第五福田小学校は、機構の支縁者である岡本卓也元教師のご配慮によって、移動して炊き出しをさせていただきました。

7月9日(月)午前9時、『クリスチャントゥデイ』は神戸国際支縁機構のボランティアをいち早く紹介。⇒ <https://www.christiantoday.co.jp/articles/25776/20180709/kiso-kurashiki-mabi-takidashi.htm>

(1) 前兆

a. 大阪北部地震

ブロック塀が倒れ、小学生が亡くなりました。

昨年の松末で起きた被害は山間部だけとは言えません。都会でも土砂崩れ、崩落、水害が起こ

ることを予期しなければなりません。日本でも比類のない砂防ダムが発達した六甲山系でも慢心することは危険です。阪神大水害(死者 933 人, 神戸市の 72%, 69 万 6 千人が罹災)で神戸は未曾有の困難を体験しました。(参照拙論『キリスト教とボランティア道』21 頁)

2008 年, 六甲山を源流とする都賀川(とががわ)で, 鉄砲水により計 26 人が流され, 5 人が亡くなりました。そのときまで行政は都賀川が「防災ふれあい河川」と住民に安全神話を与えていました。わが子を失った親に対して, 行政は謝罪, 賠償・補償, 調査の結果・公表は一切しませんでした。

b. 神戸市垂水区の土砂災害

神戸国際支縁機構の事務所がある神戸市垂水区

山陽電車 運休 2018 年 7 月 6 日午後 4 時撮影

大雨のため土砂災害, 浸水害の警報のため学校などは休校。2018 年 7 月 5 日午後 5 時, 猪名川町の工事現場で 1 人が死亡, 2 人が負傷。6 日午後山陽電鉄 須磨浦公園駅～山陽塩屋駅の線路に土砂が流入して運休。JR は各駅停車のみ運行。現場近くに住む高橋秀典氏から, 二軒が土砂崩れのため家人は避難との情報をいただきました。

午後 10 時避難する塩屋小学校を訪問しました。

2 名の垂水区役所の方が付き添っておられました。68 歳の女性が体育館で休んでおられました。

塩屋町 2 丁目 山陽電車の塩屋第 3 踏切から上がる階段(200 段程度)が, 一番上からえぐるようにがけ崩れが発生しました。中腹のお宅に土砂が流れ込みました。山陽電車も 3 日間の運行停止, と高橋氏から聞きました。

⇒ 垂水の被害 <https://www.youtube.com/watch?v=Ki0uUXhrr4Y&t=10s>

c. 福岡県朝倉市杷木(はき)松末(ますえ)は忘れ去られています

⇒ 一年後の松末 <https://youtu.be/e8jCG0vhnlk> 白木谷

参照 九州北部豪雨ボランティア

<http://kisokobe.sub.jp/article/10343/>

熊本・大分地震(2016 年 4 月 14 日,16 日)の翌年 2017 年 7 月 6 日, 小河内(こごうち)の小川組合長夫婦も豪雨により流されました。1 年が経とうとしますが, 災害危険区域のため, 住居の再建, 生活の営みの農林業も見棄てられたままです。大阪での地震被害, 災害大国日本では何が一番大切かは, 「受縁力」です。「自己責任」の悲壮な決意より, ボランティアに迷惑をかけるとは考えず, 「お世話になりま」でいい世の中に変わらないと, 南海トラフの時, 行政の力だけでは未曾有の困難に陥るでしょう。

福岡県朝倉市杷木(はき)松末(ますえ)の乙石川流域の中村地区。樋口喜寿江さん(76 歳)の生家は何も残っていません。手前の基部の井出和子さん(60 歳)は流されました。中村地区には 30

戸居住していましたが、「もうだれもおんなさらん」と言われました。

⇒ 一年後の乙石川の中村地区 <https://youtu.be/ixSQwBNkYaw>

白木谷の小島重美さん(69 歳)は杷木白木谷(しらきだに)255-1 に 2 階建ての家に住んでおられました。白木谷の集落は 30 戸ほどでした。残ったのは 2,3 軒だそうです。以前は建築の左官の仕事をされておられました。今年 1 月咽頭癌から回復したものの、突然起こった土砂崩れに遭遇されました。2 階におられましたが、奥さまの初子さんは 1 階でペットの世話をしておられました。捨て犬を飼っておられたのです。すると警報もなく心の準備ができていない中、奥さまは濁流に呑まれ、1 キロメートル先まで流されたとのことでした。

白木谷の道路は 1 年経っても、車一台が通るのがやっとでした。枝打ち、伐採をしない樹木が猛り狂って民家を襲いました。

松末コミュニティセンターの伊藤睦人会長が痛恨な思いを一時間にわたって吐露なさいました。

松末が生き残るひとつの選択肢が松末そばです。春作が 7 月には購入できます。無農薬、有機です。稲刈りと同じように刈った後、乾燥させてから、テントウムシ、バッタが混入しているのを全部取り除きます。黒いソバの実を 22.5 kg ずつにして、等級のチェックを受けます。一等級であることを信じます。



右から 4 番目がそばの収穫にいそしむ林睦徳さん(52 歳)が指導してくださいました。右端村上裕隆代表

機構の 4 人は、そばのボランティアに汗を流しました。唐箕など 4 種の操作を覚えますけれど、松末そばが松末の復旧、復興、再建に少しでも貢献できればと願ってやみません。松末には「3 人のソバ栽培者がおらっしゃる」ので、復旧、復興、再建の糸口になることを祈ります。

松末 270 戸の集落を、消滅のカウントダウンに持ち込んでいいものでしょうか。松末が復興できなければ、今後の日本のいかなる自然災害にも人間は無力であることをさらけ出すことになるだろうと確信しました。

キャプション 朝倉市高木地区の崩落したままの県道 2018 年 6 月 18 日

一年経ても、全面通行止めです。79 号線 高木集落。滑落したままです。村上裕隆代表の足もすくんでいました。50 メートル先に砕けたガードレール跡が見えました。

(2) 国, 行政の混乱

a. 岡山県倉敷市真備(まび)町の被害は異常。2018 年 7 月 7 日午後 4 時
真備町の住民も「助けてくれ!」と叫んでおられました。

現地の浸水していない場所から炊き出しのため、2 千食の食材、ボランティアメンバー、プロパンガス持ち込みの用意ができました。岡山県庁の危機管理課に 7 日午後 9 時過ぎに申し込んだところ、「部門がちがう」「落ち着いてから」「返答を待て」と反応の鈍さには失望しました。

なんでもマニュアル、タテ割り、現場無視で「上から目線」で管理する世界。机の上の仕事では、緊急時に役立ちません。3.11, 熊本・大分地震(2016 年 4 月 14 日,16 日), 九州北部豪雨(2017 年 7 月 6 日)でも社会福祉協議会, ボラセンの救援の遅れは証明済みです。

二次災害の弁解を考えるより, いのち, 暮らし, 心の復興を「今, すぐに」優先すべきでしょう。

みんなで助け合う「共感」, 「共苦」, 「共生」の日本に変えなければ, 災害大国日本の将来はないように思えます。



神戸から持ち込んだ調理具, プロパンなど

倉敷市立第二福田小学校 2018 年 7 月 9 日



炊き出しはおにぎり, パンではなく, 汁物が一番喜ばれる

b. ボランティアを管理するより, 棲み分けを

「ボランティア」と「観光」は異なります。

観光庁のお墨付きがないと, ボランティアの交通費も集められない悪法「しぼり」を国は決めました。したがって, 1 年に 2 回ほどお上の出先機関の団体がマスコミで募集して, 交通費を無料にして被災地に向かいます。

「官」の下部組織だけが動いても, マンパワーが必要だから焼け石に水みたいなものです。人命が関係しています。国はなんとかしろ, というボランティア仲間の声があがっています。

残念ながら, 政治家は被災現場でボランティアをしたことがないので, バラ色のようにボランティ

アバス問題が改訂されたと昨年発題しました。

「ボランティア」と「旅行」は異なります。

ボランティアバスについては緩和されたはいえ、「旅行業法」が大きな壁になっています。

ボランティア主催者が①交通費、宿泊費などの報酬を得る。②宿泊の手配など一定の行為を行う。③一般に参加を呼びかけるなどをすると旅行業とみなされます。

3項目を行なうグループは、「旅行業」とみなされ、旅行業登録をしている(一般的には旅行会社)しかボランティアは実施できない悪法に目覚めていただきたいものです。

政権与党は憲法を変えることに心血を注ぐより、人権を守るために法律を手直しすればよいのです。

役所の人たちは、食材、電気系統、上下水道などの復旧には適役です。人間を相手にするのはボランティアの方がはるかにまさっています。したがって、被災現場では、活動の棲み分けが求められます。

現場の被災者にはボランティア、防災士、医療者が接するようにします。役所は、地域の連絡、情報の伝達、分配に専念し、ボランティアを補佐するようにする構図にシフトすべきです。

そうすることにより、日本列島全体が、被災者のうめき、悲しみ、怒りを共有し、有機的に助け合うことができます。

阪神・淡路大震災のボランティア元年から 22 年、もう一度総点検すべきです。(拙論 季刊誌『支縁』No.20 2017 年 8 月 4 日 2-3 頁)。

c. 今こそ「田・山・湾の復活」を! “Resurrection of Rice Field, Mountain, and Bay”

⇒ 「田・山・湾の復活」

(3) 災害大国が進むべき道

a. ダム、砂防ダムの決壊がもたらした人災

土砂災害警戒情報は科学的根拠があるのだから、すぐに声がけして避難すべきだったと気象予報士は語ります。しかし、科学的根拠という言葉のマジックに日本人は弱いことを逆手にとっての一種の騙しです。

たとえば、広島・安佐区については、2014 年 8 月に、土砂災害により死者 77 人を出しました。住民が今回も避難しなかった最大の理由をマスコミは取りあげようとしません。欺瞞です。広島市安芸区矢野東7の梅河団地(約 100 世帯)では十数棟が倒壊しました。10 人が安否不明になっています。団地の山側には、今年に入って砂防ダムが完成したばかりなのに、大雨で崩壊しました。

昨年 2017 年 5 月 15 日の『産経新聞』などは「広島の砂防ダム緊急事業終了」と報道しました。同記事によれば、広島大大学院生の島本俊樹さん(25)は「雨の強い日は、また崩れたらと嫌だったが、これで一安心」という住民の技術信頼が避難勧告を対岸の火事のように思い込んだことを、メディア関係者は報告すべきです。

岡山県倉敷市では小田川左岸の堤防が決壊しました。真備(まび)町地区(約 8900 世帯)の4分

の1程度の面積が水没しました。市役所支所が浸水や停電で機能しなくなりました。被害状況の把握はだれも答えられませんでした。倉敷市立第二福田小学校に避難していた水川忠一さん(77歳)は、7日未明1時半に田んぼが気に入り、見に行ったところ、小田川から増水した水が逆流水田を覆っていたから、2時半の避難指示にすぐに従ったと、言われていました。屋根上で『いんどらん』(帰っていない)人々の約450人は消防士のゴムボートで救出されたと語られました。

7年前に脳梗塞で歩きにくくなった妹尾春子さん(76歳)は2階へ逃げるしかなかったそうです。二階の天井にまで水が覆ってきたので、息子の齊(ひとし)さんは、バスタオルで屋根の上にお母さんを引き上げて、母の一命をとりとめたと言っておられました。

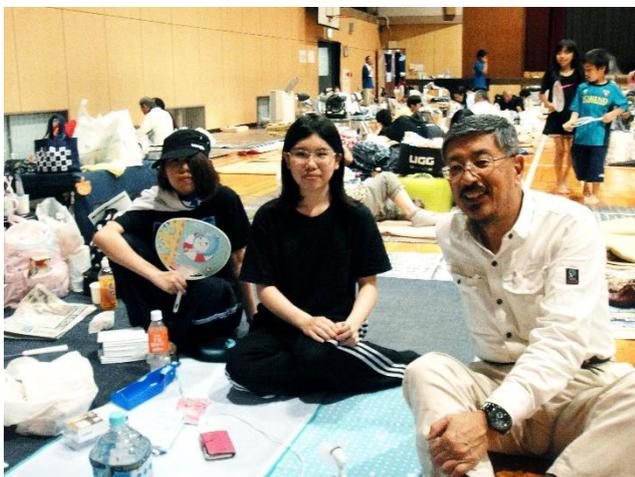
妹尾春子さん 2018年7月8日 避難所

つまり住民は高梁(たかなし)川にはダムがたくさんあるので、洪水調整ができるにちがいないと考えていたのです。今回の水害は自然災害というより、人災と言えます。

キャプション 技術の粋をこらした朝倉市高木地区の砂防ダム 2018年6月18日

今、ワールドカップで日本列島全体が熱狂のうずまきに包まれているかの様相です。2018年3月頃から、サッカーの審判の誤審を防ぐために、VAR(ビデオ・アシスタント・レフェリー)が判定に影響を及ぼすようになったそうです。33台のカメラが選手のハンドかどうかシーンを分析されるわけです。しかし、ビデオの確認室内でも意見がわかれ、時間を要しました。選手がVAR判定を求めて、試合が中断しました。「人間が採り入れたテクノロジーに人間が縛られ、サッカーそのものを壊しているように見える」と『NHK』クローズアップ現代(2014年10月14日)は放映しました。

雨量によって道路が川と化すことはどこでも起きうる災害です。上流部分の砂防ダムなどが決壊すると、たちまちのうちに増水、河川堤防決壊、土砂崩れが起きます。岡山県倉敷市真備(まび)町の小田川の蛇行と高梁川の交差する場面はだれでもが危険だと思っていました。倉敷市立第二福田小学校体育館に避難されていた柁島未菜さん(20歳)は、いつかは災害をもたらすと住民は不安であったと語りました。



真ん中が柁島未菜さん 2018年7月8日
第二福田小学校

1967年7月9日、6時間で約300ミリの豪雨により、六甲山系の多くの場所で土砂災害、河川の氾濫が発生。家屋38,305戸が被災、92名もの尊い人命が失われました。600基を超える砂防ダムが建設されていたにもかかわらず起きた被害でした。

砂防ダムは2014年7月9日の土石流被害を防ぎきることはできませんでした。2014年3月に完成した南木曾の砂防ダムも役に立たず、犠牲者を出しました。

コンクリート製の建造物で谷を埋めるのではなく、自然林の治水力を活かすとか、自然の営みとして流された土砂が人間にとって不都合ならば下流で浚渫(しゅんせつ)するなどして自然に合わせた暮らしを取り戻すことができます。

b. 技術信頼の落とし穴

聖書には、「信心から信心へ」(ローマ 1:17 エクピステオース エイスピスティン)と進歩していく表現があります。日本人の多くのテレビ番組で茶の間を独占しているひとつにサスペンスものがあります。単純に真犯人が特定できない複雑な脚本に人気があります。犯人の巧妙な犯罪トリックの解き明かしに視聴者は釘付けになります。防犯カメラの分析を科学的にする場面も必須です。「信心」ではなく、「悪から悪へ」と深化しています。アメリカでも3000万台にのぼる防犯カメラによる誤認逮捕が問題となっています。FBI訓練担当者によると、「ビデオは、実際には録画の段階で加工されているのです。最初に我々が教えるのは、映像で見えているものは事実ではないということです」と、FBI捜査官の長は防犯カメラが絶対ではないと述べました。“The Washington Post” July 2, 2016。

ハイテク産業[最先端(high)の技術(technology) 先端技術産業], アップル, インテル, Google, Facebook, アドビシステムズなどが、日本を含め全世界の子どもたちの思いにも影響を与え、しっかり根を下ろしています。

パソコン, スマホ, AI(人工知能 artificial intelligence)などの技術開発について、人類は万能の神のように崇めています。自然災害に対して、それを忘れたとき人間が開発した機械が救世主ならば、西日本豪雨で200名以上になろうとする死者は出なかったはずです。

c. 技術者の奢り

技術専門家, 行政, マスコミ関係者は高慢の極みに達しています。昨年、40人以上の死者を出した松末の豪雨災害も忘却している時に、ふいをつかれまして。今回の西日本豪雨は土木工学, 気象・地震予知研究者, 企業の技術者に痛烈なパンチを浴びせたのではないのでしょうか。

みんなで被災現場で復旧, 復興, 再建に取り組めるようにすべきなのに、権力, 技術を手放したくない学者, 行政, 政府は上から管理して、無能にもかかわらず、自己正義を追求します。2011年3月、フクシマのメルトダウンに際して、低線量被ばく, 子どもの甲状腺問題, 作物, 生き物の放射能被害の危険性はありました。しかし、学校の給食を自分たちの子どもに食べさせないようにした素人のママさんたちの意見をお上は無視しました。科学的根拠がないと強弁した専門家, 御用学者, 厚労省の役人には奢りがあつたのではないのでしょうか。

エデンの園を追放されたアダムとエバの息子カインは弟アベルを殺しました。その後、カインは

「町を建て」ました(創世記 4:17)。さらにカインの子孫であるトバル・カインは「青銅や鉄でさまざまな道具を作る」技術者として人類歴史にデビューしました。高慢の極みに達したニムロデは「さあ、天まで届く塔のある町を建て、有名になろう」と技術力を誇示しました(創世記 11:4)。現代のテクノロジーの萌芽です。専門家はどんな病気、貧困、戦争の危険姓についても技術をもってすれば対抗できると、技術的合理主義を追求してきました。

コンピューター、オートメーション、大量生産は利便性、快適性、サービスをもたらしました。技術至上こそが人類を幸福にしたと、オウム真理教顔負けの崇拜行為に近似するものになりました。技術=神として、技術を独占支配することが国の権威の裏付けに変貌しました。国の支配者、つまりお上が、気象衛星、リニア、原発再稼働の決定をします。

日本のテレビドラマはワンパターンです。「水戸黄門」「遠山金四郎」「徳川吉宗」など、「お上」が悪者をやっけて懲らしめる勧善懲悪“right and wrong” movie に一喜一憂します。しかし、海外ドラマは貧しい者、差別されていた奴隷、身分の低い者が搾取する企業経営者、私腹をこやす政治屋、悪代官をやっつけるストーリーが多いです。日本人は震災、水害などの被災の時に、お上がやってくれるのは当たり前と無償、自主、対話性のボランティアも育ちません。官尊民卑の意識が強く、「民権」の考え方はなかなか定着しないことも残念です。

<結論>

2018年6月16日～20日、九州北部豪雨で、被害にあった松末に4人で訪問をしました。一人は熊本・大分地震(2016年4月14日,16日)に第1次に参加された大島健二郎さん(33歳)です。松末には、今回で6回目になります。朝倉市小河内(こごうち)の小川組合長夫婦も2017年7月7日の豪雨により流されました。1年が経とうとしますが、災害危険区域のため、住居の再建、生活の営みの農林業も見棄てられたままです。

1897[明治30]年の砂防法によって、全国各地に土砂崩れ、滑落、鉄砲水による災害に備える土木が、砂防ダムに堆積したスギなどが被害を大きくしました。一年前に壊れたダムが散在しています。

大阪での地震被害、災害大国日本では何が一番大切かは、「受縁力」です。お上から与えられた「自己責任」というキーワードの悲壮な決意から脱却すべきです。ボランティアに迷惑をかけるとは考えず、「お世話になります」でいい世の中に変わらないと、南海トラフの時、行政の力だけでは未曾有の困難に陥るでしょう。ボランティア元年と言われる阪神・淡路大震災の約140万人の自発的なボランティア人数から23年でボランティア従事者は一割以下に減ってしまいました。みんなで助け合う「魂は残さんとばい」と松末の樋口實さん(78歳)は語られました。

被災から一年を経て、目や耳にするかしないか被災に対する公共政策、青写真、計画も被災者が難渋している苦悩を解決することはできません。被災現場で社協やボラセンが管理するやり方では復興はできません。全国から押しかける名もない、資格もない、ただ思いやりがある多くの人的資源を受け入れないかぎり、「共生」live together, 「共苦」share sufferings, 「苦縁」Relationship to share sufferings の芽が育たないでしょう。

被災なされた「貧者」の中に御仏、キリストがおられると信じます。若者がボランティア道に取り組めば、技術、経済、貪欲の価値観から転向する契機になるでしょう。